

給料をもらえなくなったスペイン

若者のほぼ2人に1人は職がないスペインで、起業に挑む人が増えている。なかには自分の能力を試みたいというケースもあるが、働き口がなくて仕方なく、という人も多いう。日本と同じぐらいの賃金水準で推移してきたスペインに、若者たちを訪ねた。

バルセロナの旧市街。古い建物を改装した共有オフィスをのぞくと、80人ほどの若者たちが、パソコンに向かっていた。起業家やデザイナー、プログラマー、社会活動家。特定の企業に雇われずに生きる若者たちだ。

マルタ・ウルデツチ(26)は、自ら企画・運営する映画イベントが2週間後に迫っていた。出場者は映画の構想を短時間でプレゼンし、一緒に制作する仲間や資金の出し手を募るのだという。「自分のアイデアで新しい領域を切り開いていきます。今は雇われるつもりはありません」

欧州連合(EU)の統計によると、スペインの若者が起業する割合は7%で、2%に満たないドイツの4倍以上だ。

バルセロナにある失業対策のNPOは起業家に無利子で融資している。会長ウリオル・ルマンサス(68)は、「技能もない若い人が長続きさせるのは難しい」と話す。1人での起業への融資は、厳しく審査しても3割が焦げ付くという。

やむにやまれず起業した人にも会った。

photo: Ebuchi Takashi



得意客に造花をサービスするセリーナ

バルセロナの近郊にある商店街で小さな量り売りの香水店を営むオリティア・セリーナ(27)。かつては薬局で働いていた。ところが、いま3歳になる長女を妊娠したときに解雇された。夫(31)も細切れの仕事しかない。何十もの薬局に面接を申し込んだが職は見つからず、2年前にフランチャイズチェーンの香水販売を始めた。

月に5000ユーロ(約62万円)売り上げることもあるが、仕入れや家賃の支払い、社会保険料を引くと、手元には1000ユーロも残らない。収入は薬局勤務の時より少ない。バイク事故でケガをし、1カ月店を開めたときは経費だけが出ていった。「安定した働き口があれば雇ってもらいたい」(江渕崇)

「賃金の世界」の外に生きる

「時間銀行」という試みがスペインなどで広がっている。お金で支払われる給料とは違う価値をもとにした経済だ。

4月下旬、マドリッド郊外の個人宅に女性4人が集まった。音楽に合わせて妖艶に腰を振るアラブの踊りのレッスンに1時間半、汗を流した。講師のナジヤット・チェックが受け取るのはユーロではない。「時間」という

単位の報酬だ。犬の散歩、マッサージ、パソコンの修理、英会話。なんでも1時間サービスすれば、その分を口座にためられる。人に頼むときはその時間分を口座から払う。チェックが参加しているリバス時間銀行の会員は350人。ネットを介してやりとりしている。こうした組織はスペインに300以上ある。

だれが何をしても、1時間は1時間と評価される。「雇用なしで生きる」という本を書いた時間銀行の専門家、フリオ・ヒスベール(51)は、本業が銀行員。「既存の経済では、限られた労働しか評価しない。雇用がポロポロの今だから、だれもが自己肯定感を持てる、もう一つの経済をつくる意味があります」(江渕崇)

あり方が根本から見直されるでしょう。中国やインドが先進国の仕事を奪っているというのは誤解です。私は1980年代にシンガポールの国連大使として米国に赴任していました。そのとき米国は「日本が仕事を奪っている」と言っていました。日本からの輸出攻勢への反発からです。しかしGMの車が売れなくなり、逆にトヨタの車が売れたのはトヨタが生産性を高め、デザインを改善し、消費者のニーズをくんだからです。GMもそれに気づいて適応しました。

先進国の仕事がなくなることへの解決策は、国境に壁を築いたり、関税を課したりすることではありません。国民に教育を受けさせ、変化に対応できる能力を養うことです。日本は、80年代までうまくいったモデルに、とらわれすぎではありませんか？

世界は劇的に変わっています。ヘンリー・フォードが自動車の大量生産に成功し、馬車という当時の大産業がつぶれてしまいました。自動車運転手が普及すれば、タクシー運転手は新たな仕事を考えなければなりません。時計の針を止めることはできないのです。(聞き手・江渕崇)

Kishore Mahbubani シンガポール国立大学のリー・クアンユー公共政策大学院長、元シンガポール外務次官。インド系移民の両親を持ち、「アジア主義」の論客として知られる。著書に、「大収斂」「アジア半球」が世界を動かす。1948年生まれ。